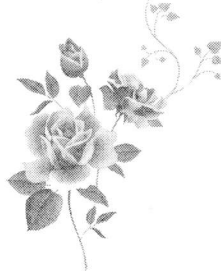


# 吉祥院子ども六齋 で学んだこと

西片 里紗(19歳)

六齋歴史研究会獅子の如く編集部



## 新しいことへの挑戦

六齋念仏とは、私にとってどんなものか？そう聞かれれば私は、私にとって必要なものという漠然とした答えを返すだろう。六齋念仏を始めて、今年で11年になる。その11年の中にあるのは、ただ楽しかったという思い出だけではない。小学生の頃、よく泣いていた。「本番に出たくないのか。」「やる気がないなら帰れ」今に比べれば、昔は厳しかったと思う。私は軽い気持ちで始めたことなのに、どうしてそんなことを言われなければならないのか、ただひたすらにそう思っていた。その時は分からなかったが、どれほど年配の人が本気で取り組んできたか、私たちの原点となってくれた人たちがどれほど苦しい思いをしてきたか、今なら分かる。それを踏みにじられることは、例え小学生でも、私なら耐えられない。では、それを理解していなかった私は、今まで辛い思いをして、六齋を続けてきたのかというと、そういうわけでもない。それ以上に私を惹きつける何かがあるのだ。

それは、新しいことへの挑戦や、歳を重ねるごとにわかる自分の成長、そして、時に叱られ、励まされ、共に笑いあえるかけがえのない仲間、冒頭の質問で、漠然とした答えしか出ないのは、そこにたくさんの理由が含まれているからだ。

魅力というものは、必ずしもそれだけの要素ではないと思う。それを支えているもの、人、

環境などが合わさって“魅力”というのではないだろうか。私は、その六齋の魅力に魅せられた。だから、19歳になった今でも六齋を続けているのだ。そんな私にも六齋に飽きた時期はあった。中学1年生の頃だ。行くのが面倒になり、六齋を続ける支えになっていたのは幼馴染だけ。しかし、小学校の先生と中学校の先生が熱心に見学に来てくれていたので、中学生なりにしっかりしなくては、という思いがあった。2年生になり自分の成長が少し見えた。春と夏にあるお祭りで、必ず「うまくなったね。」と声をかけてもらえた。うれしくもあり、少しむず痒かった。それが高校生になり、だんだんとコツをつかんできて、「うまくなったね。」が「さすがすごいね」になった。コツを掴めたし、何が上手くて、何が下手なのかを判断できるようになったから、自分がうまいという認識で見られているのが複雑で、どうも素直に受け入れられない。六齋の『研究会』に入ったのも、高校生になってからだ。ここで六齋の歴史を学び、知識を掘り下げていった。研究会に入り、過去を振り返ることで、こんなにも六齋に思い入れがあったことに気づいた。私には、六齋はなくてはならないもの。そう実感できた。六齋を見直し、仲間というものを再確認し、支えてくれている人々に感謝をし、そして、これからも六齋を続けていこうと思う。

自分たちの表現の場として、六齋に関わり、六齋が好きだからこそ、六齋保存活動に参加する。子どもたちは、自己実現や精神的な充足のため、六齋保存に参加し、活動する傾向が強い。厳しい指導や叱られることで、六齋活動から離れてしまうことや、中学校になって、学業やクラブ活動などで練習に参加し、関心が移ってしまうなどの問題も発生する。

しかし里紗たちは、現在まで六齋に参加し続け、自ら子ども六齋会の練習指導まで行っている。六齋を通じて、里紗は本当に成長してくれた。この成長こそが「子ども六齋会」を立ち上げた目的であり、ご指導いただく保存会や杉田先生たちの願いだったに違いない。